

## 合併症妊婦から出生した児の新生児期・乳児期の問題点

(分担研究：ハイリスク新生児の管理に関する研究)

研究協力者：鬼頭 秀行

共同研究者：岩瀬 一弘

要約：平成5年から7年に聖隷浜松病院NICUに入院した児1255例のうち死亡した84例の死亡原因と、平成7年に当院産科で分娩した1639例について産科および周産期合併症と児の問題点を検討した。児の死亡例の在胎週数は、在胎27週以前、在胎37週以降に多く分布していた。その死因は、周産期の合併症では常位胎盤早期剥離、胎児仮死、骨盤位分娩、妊娠中の合併症では双胎間輸血症候群、新生児期の合併症では敗血症、腸穿孔が多かった。産科および周産期合併症の検討では、院内出生児の早期産率は、院内管理例7.7%、母体搬送例95.0%、多胎妊娠の早期産率は、院内管理例27.0%、母体搬送例76.9%と前者の方が低く、前者の早期産予防効果が顕著であった。前置胎盤の児の予後は良好だったが、常位胎盤早期剥離の児の死亡率が28.6%と高かった。産科合併症を有する場合にも、周産期管理の重要性が改めて認識された。

見出し語：産科合併症、周産期管理、短期予後

緒言：周産期医療の向上のためには、基礎疾患を有する母体から出生する児、産科および周産期合併症を有する母体から出生する児の短期予後のみならず、長期予後も改善することが重要である。今回は、新生児センターに入院した児のうち死亡例の死亡原因を検討し、その中で産科および周産期合併症と児の問題点を調査した。

### 研究方法：

1. 平成5年から7年の3年間に聖隷浜松病院新生児・未熟児センターに入院した児1255例のうち死亡した84例を対象として在胎週数、出生体重、死亡原因などを検討した。
2. 平成7年に当院産科にて分娩した1639例の産科および周産期合併症（早期産、前置胎盤、常位胎盤早期剥離、多胎）と児の予後、問題点を検討した。

### 研究成績：

1. 新生児・未熟児センターへ入院し、死亡した児84例についての検討：1) 児の在胎週数について。在胎27週以前18例、在胎28から31週9例、在胎32から36週18例、在胎37週以降39例であった。(表1-1) 2) 児の出生体重について。出生体重1000g未満18例、1000以上1500g未満9例、1500以上2000g未満10例、2000以上2500g未満19例、2500以上28例であった。(表1-2) 3) 児の死亡原因について。死亡原因を①周産期の合併症②妊娠中の合併症③新生児期の合併症④染色体異常症⑤染色体異常症を除く先天異常の5項目に分類して検討した。周産期の合併症によるもの15例（早期産児10例）、妊娠中の合併症によるもの5例（早期産児4例）、新生児期の合併症によるもの16例（早期産児13例）、染色体異常症15例（早期産児5例）、染色体異常症を除く先天異常によるもの33例（早期産児13例）の計84例（早期産児45例）であった。その中で、周産期の合併症では常位胎盤早期剥離5例、胎児仮死5例、骨盤位分娩3例、妊娠中の合併症では双胎間輸血症候群4例、新生児期の合併症では敗血症7例、腸穿孔3例が多かった。(表2) 以上より新生児の死亡原因として早期産・低出生体重児（特に在胎27週以前、出生体重1000g未満の児）・多胎妊娠・常位胎盤早期剥離・感染症・染色体異常症等の先天異常が問題であった。
2. 周産期および産科合併症と児の予後、問題点についての検討：死亡例の検討より判明した死亡原因のうちの、早期産、多胎、常位胎盤早期剥離と前置胎盤について検討した。1) 早期産率と早産予防治療開始時期について。平成7年の院内出生児の早期産率は、院内管理例（妊娠前期より分娩まで当院産科で管理された例）では7.7%であったが、母体搬送例（妊娠中期以降に産科施設より母体搬送され当院産科で分娩となった例）では95.0%であった。院内管理例では母体搬送例より早期に早産予防治療が開始される比率が高く、前者の早期産予防効果が顕著であった。(表3) 2) 多胎妊娠母体の入院期間と早期産率について。院内管理例では、早期産率が27.0%であったのに対し、母体搬送例では、76.9%と前者の方が明らかに低く、母体の妊娠中の入院期間は明らかに前者で長かった。(表4) 3) 前置胎盤・常位胎盤早期剥離と児の予後について。前置胎盤、常位胎盤早期剥離とも児の入院率は50%であった。しかし、前者では死亡が

0%であったのに対し、後者では子宮内胎児死亡を含め、死亡率が28.6%と高く、生命予後は不良であった。(表5)

考察：静岡県西部地域の周産期センターの役割を担っている当院産科・小児科において、平成5-7年にNICUに入院し、その後死亡した児の死亡原因と、平成7年に当院産科での分娩例の産科および周産期合併症と児の予後について報告した。死亡原因の検討については、『母子保健の主たる統計』（平成7年度刊行）と同様早期産、超低出生体重児、周産期に発生した主要病態が多かった。また早期産にかかわる検討では、母体搬送例と比較して、院内管理例は、早期より早期産予防治療が開始され、多胎妊娠例では早期より入院管理が行われることで、早期産率が減少し、児の予後に良好な結果を得ていると推定された。常位胎盤早期剥離では児の死亡率が28.6%であったが、諸家の報告でも30-50%であり、まだ検討すべき問題が多々あると考えられた。以上より今回前述した産科および周産期合併症を有する妊婦に対して、第一次・第二次医療に当たる産科医療機関の管理の向上と第三次医療機関の産科・小児科がよく連携して適切な周産期管理が行われれば、新生児の予後の向上に寄与できると思われた。

### 結論：

1. 平成5-7年の3年間で当院NICUに入院した1255例のうち、死亡例は84例であった。在胎週数は、在胎27週以前と在胎37週以降に多く分布していた。死亡原因としては、周産期の合併症では常位胎盤早期剥離、胎児仮死、骨盤位分娩、妊娠中の合併症では、双胎間輸血症候群、新生児期の合併症では早期産児の敗血症、腸穿孔が多かった。
2. 平成7年の院内出生児の早期産率は、院内管理例では7.7%、母体搬送例では95.0%であった。前者では早産予防治療開始時期が早く、その効果が顕著であった。
3. 多胎妊娠の早期産率は、院内管理例では27.0%、母体搬送例では76.9%とであった。前者では母体の妊娠中の入院期間は長かった。
4. 前置胎盤、常位胎盤早期剥離とも、児の入院率は50%であったが、後者では死亡率が28.6%と高く、生命予後は不良であった。
5. 以上より、産科および周産期合併症を有する例も、周産期管理の重要性が改めて認識された。

### 参考文献：

- 1) 財団法人母子衛生研究会編：母子保健の主たる統計，平成7年度刊行：86-89，1995

表1 NICU入院児死亡例の在胎週数・出生体重別分布

1) 在胎週数

在胎週数	～27	28～31	32～36	37～	計	総入院数	死亡率
平成5年	3	1	4	13	21	384	5.4%
平成6年	7	4	10	11	32	449	7.1%
平成7年	8	4	4	15	31	412	7.5%
計	18	9	18	39	84	1255	6.6%

2) 出生体重

出生体重	<1000	<1500	<2000	<2500	2500≤	計	総入院数	死亡率
平成5年	4	1	2	6	8	21	384	5.4%
平成6年	7	4	4	7	10	32	449	7.1%
平成7年	7	4	4	6	10	31	412	7.5%
計	18	9	10	19	28	84	1255	6.6%

表3 早産予防治療開始時期と分娩週数・早期産率（平成7年院内出生児）

	週数	～27	28～31	32～36	37～	計	総入院数	早期産率
院内管理例	治療開始数	272	99	81	1	453	1519	7.7%
	分娩数	0	11	24	418	453		
母体搬送例	治療開始数	17	15	8	0	40	120	95.0%
	分娩数	8	15	15	2	40		

表4 多胎妊娠母体の入院期間と早期産率（平成7年院内出生児）

	週数	～27	28～31	32～36	37～	計	早期産率
院内管理例	組数	0	2	8(2)	27	37(2)	10/37 27.0%
	入院児数	0	4	12(6)	6	22(6)	
	母体平均入院日数		25	57	47		
母体搬送例	組数	2(1)	3	5	3	13(1)	10/13 76.9%
	入院児数	5(3)	6	7	0	18(3)	
	母体平均入院日数	10	1	12	23		

( ): 産胎

表5 前置胎盤・胎盤早期剥離と児の予後（平成7年院内出生児）

	件数	入院数	入院率	死亡数	死亡率
前置胎盤	14	7	50%	0	0.0%
胎盤早期剥離	14	7	50%	4(2)	28.6%

( ): 子宮内胎児死亡

表2 平成5～7年NICU入院児の死亡原因の内訳

周産期の合併症	15例 (10)
常位胎盤早期剥離	5例 (4)
胎児仮死	5例 (3)
骨盤位分娩	3例 (2)
子宮破裂	1例
長期破水	1例 (1)
妊娠中の合併症	5例 (4)
双胎間輸血症候群	4例 (4)
母体合併症妊娠	1例
新生児期の合併症	16例 (13)
敗血症	7例 (6)
腸穿孔	3例 (3)
肺炎・臍胸	1例 (1)
頭蓋内出血	1例 (1)
重症肝機能障害	1例
出血性ショック	1例
間質性肺炎	1例 (1)
乳幼児突然死症候群	1例 (1)
染色体異常症	15例 (5)
染色体異常症を除く先天異常	33例 (13)
合計	84例 (45)
	( ): 早期産児数



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:平成5年から7年に聖隷浜松病院 NICU に入院した児 1255 例のうち死亡した 84 例の死亡原因と、平成7年に当院産科で分娩した 1639 例について産科および周産期合併症と児の問題点を検討した。児の死亡例の在胎週数は、在胎 27 週以前、在胎 37 週以降に多く分布していた。その死因は、周産期の合併症では常位胎盤早期剥離、胎児仮死、骨盤位分娩、妊娠中の合併症では双胎間輸血症候群、新生児期の合併症では敗血症、腸穿孔が多かった。産科および周産期合併症の検討では、院内出生児の早期産率は、院内管理例 7.7%、母体搬送例 95.0%、多胎妊娠の早期産率は、院内管理例 27.0%、母体搬送例 76.9%と前者の方が低く、前者の早期産予防効果が顕著であった。前置胎盤の児の予後は良好だったが、常位胎盤早期剥離の児の死亡率が 28.6%と高かった。産科合併症を有する場合にも、周産期管理の重要性が改めて認識された。